

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 前田地区の文化財を訪ねる

講師 大嶋和則（高松市文化財専門員）

平成21年4月26日（日）

共催 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

はじめに

前田地区および小村町は、古くは「宮処」みやとしろと呼ばれていました。最も古い記録としては、平城京左京二条二坊五坪二条大路濠状遺構で出土した木簡で、「讚岐国宮処郷戸主〔綾カ〕勝 祇祇祇神龜」とあり、少なくとも神龜年間（七二四〜七二九）には宮処郷と呼ばれていたことが判明しています。「宮処」は「宮處」「宮所」とも書き、宮殿や役所があった場所を指すと言われています。伝承では、景行天皇の皇子である神櫛王かみぐしおうの居館があった場所という説と、山田郡の郡衙ぐんががあったという説があります。神櫛王は讚岐の国造の祖とされ、孫の須売保礼命すめほれのみことや子孫の星直ほしのあたえが国造になったと言われています。

前田の古代の様子を文献上知ることはできませんが、六六七年には屋島やしまのきに築かれており、讚岐の中でも山田郡が重要拠点として位置付けられていたことがうかがえます。特に、古高松から前田にかけては、さらに前代の古墳時代に古墳が数多く造られていることから、重要な地域と考えられます。

なお、神櫛王の子孫は後世に高松・三木・寒川・神内・三谷・十河・植田・由良・池田・村尾など二十八氏に分かれたと言われています。この伝承からすると、中世に活躍した前田城の城主である前田氏も神櫛王の子孫ということになります。



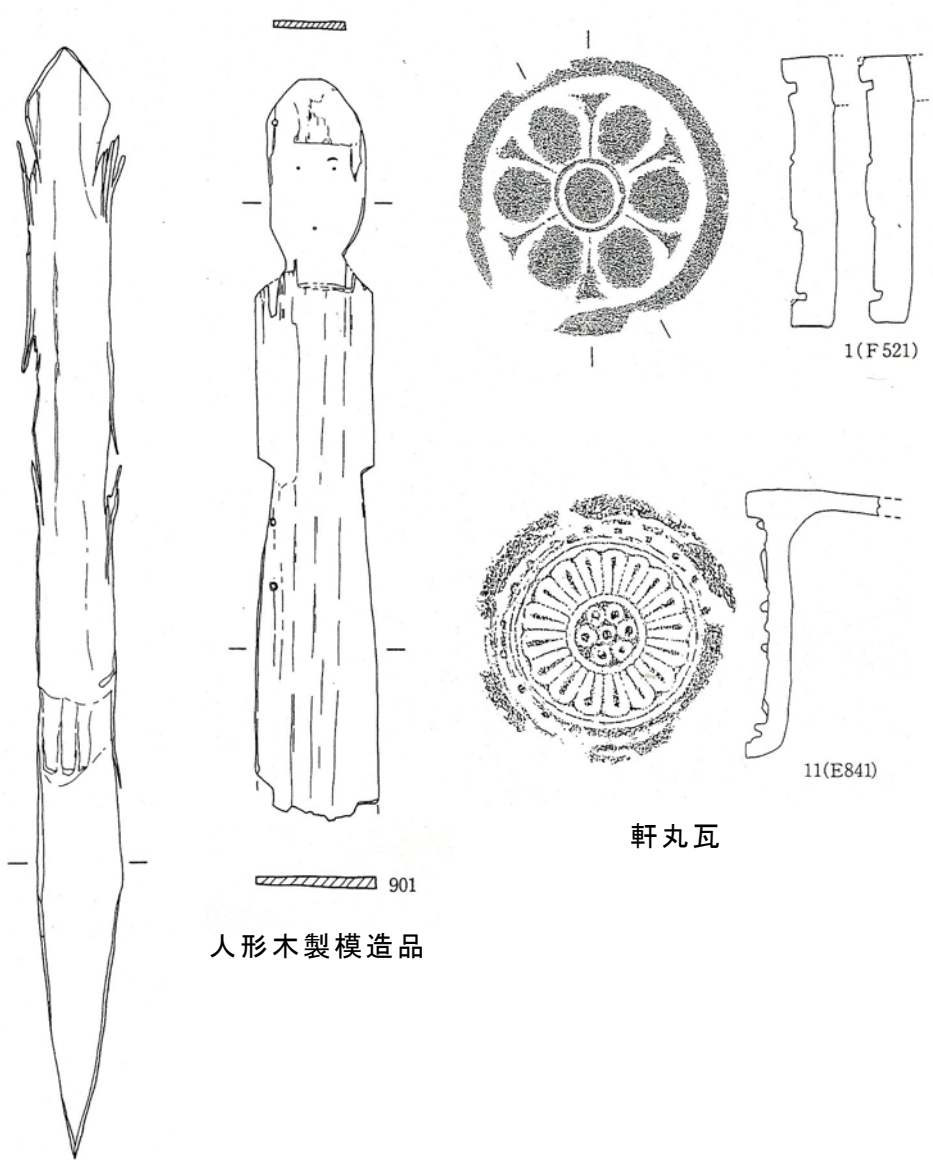
前田地区北部の主な文化財位置図

1 観音庵 かんのんあん

享禄二年（一五二九）に奥州岩崎（宮城県）三万石の城主黒川四郎右衛門亮氏の孫の四郎右衛門正成によって創建されたと伝えられています。天正十年（一五八二）に兵火にかかり、本尊の聖観世音菩薩も背部に大火傷しました。元禄二年（一六八九）黒川卯右衛門忠重が堂宇を復興し、その後一族から代々尼僧を出して維持しました。本尊は焼膚観音と呼ばれ、火傷をした人が祈願すれば靈験があると言い伝えられています。

2 前田東・中村遺跡 まえだひがし・なかむらいせき

前田東・中村遺跡では縄文土器や弥生土器等も出土していますが、古代の遺構・遺物が最も多く見られます。大型の掘立柱建物跡が検出されたことや、帯金具・墨書土器・瓦の出土から付近に郡衙などの公的施設が存在した可能性が高く、遺跡の東端で検出した川跡から、祭祀用の斎串ゆぐしや人形木製品が多量に出土していることから、祓所ほうじゆじの可能性も考えられています。また、遺跡の北約二百メートルに所在する堂床どうとこは宝寿寺ほうじゆじの跡と考えられています。その寺域が前田東・中村遺跡まで及ぶ可能性も考えられています。



人形木製模造品

軒丸瓦

齋串

前田東・中村遺跡出土遺物実測図

3 宝寿寺跡（堂床）

ほうじゆじあと だうとこ

東西約九・五メートル、南北約四・五メートルの堂床と呼ばれる土壇に礎石が残っており、白鳳期の古瓦が出土していることから、宝寿寺跡の一部と考えられています。宝寿寺は宮處八幡宮みやしろはちまんぐうの別当でした。その後衰退していましたが、鎌倉時代から室町時代の初期に平尾山の阿弥陀寺付近に復興されており、同地からも古瓦が出土しています。天正年間（一五七三〜一五九二）に兵火にあい、伽藍は焼失し、慶長年間（一五九六〜一六一五）に阿弥陀寺北西約八百メートル北西の岡崎がらきの地に伽藍を再建し、押光寺と改称しました。明治二年（一八六九）の神仏分離によって廃寺になりました。

4 阿弥陀寺（真言宗平尾山）

あみだじ

本尊阿弥陀如来

廃寺になった押光寺の御本尊阿弥陀如来は番町の地藏寺に預けられていましたが、明治三十年（一八九七）頃前田村にお迎えし、しばらく長妙寺に預けられました。明治三十五（一九〇二）年頃に宝寿寺ゆかりの地である平尾山に平尾庵を建立し、御本尊を祀るようになりました。終戦後、阿弥陀寺と改称しました。

5 長妙寺（真宗興正派松谷山我浄院）

ちようみようじ

本尊阿弥陀如来

文明年間（一四六九～一四八七）に創建され、天正年間（一五七三～一五九二）の兵火により廃絶していましたが、安永年間（一七七二～一七八一）に再興されました。

6 西光寺（真宗興正派紫雲山安楽院）

さいこうじ

本尊阿弥陀如来

天正年間（一五七三～一五九二）に創建されましたが、その後兵火にかかり、現在の地に再建しました。元は天台宗に属していましたが、寛文五年（一六六五）興正寺第七代円超上人から寺号を下付され、浄土真宗に改宗しました。

7 前田城跡（高松市指定史跡）

まえだじょうあと

南に伸びる低い尾根の先端に築かれており、本丸は東西三十六メートル、南北五十二メートルの長方形で、周囲に土塁がめぐっています。さらに、本丸の中央部には南北を区画するように土塁で仕切られています。また、本丸の周囲には空堀跡と考えら

れる幅五〜十メートルの畑地が巡
 っており、北側では切岸、南西側
 では土塁が残存しています。堀の
 南側には二の丸があり、現在薬師
 庵（宝寿寺）となっています。

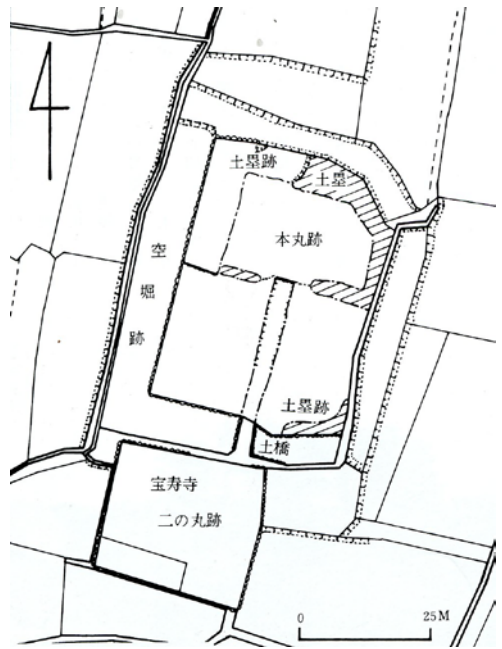
前田城は『南海通記』によると、
 文明年間（一四六九〜一四八七）

に、十河城主十河景滋かげはるの弟
 頼母頭宗存たのかみむねまさが分家し、前田に本拠

を構えたことに始まります。二代主殿頭宗治しゅどのかみむねはる、三代甚之丞宗清じんのじょうむねきよと続きますが、天正十
 二年（一五八四）に土佐の長宗我部元親軍に敗れ、廃城となったと言われています。

三代甚之丞については『南海通記』に詳しい記述が見られます。六尺（約一・八メ
 ートル）の堀を飛び越える軽業の持ち主で、弓にかけては百発百中の名人で、泣く子
 も黙るほど恐れられていました。わずかの手勢で木太町の向城、鬼無町の佐藤城など
 に忍び入り、人を切り殺し財物を奪ったこともあります。天正十年（一五八二）、長宗

我部元親が香川親政ちかまさ（元親の子で天霧城主香川信景のぶかげ）を総大将として一万一千余人が



前田城跡周辺図（秋山 1982 より）

十河城を包囲した時には籠城戦となり、甚之丞が夜討ちをかけて兵糧や武具などを奪い、兵糧の調達をしました。また、親政の暗殺を企て、本陣に夜討ちをかけましたが、失敗に終わっています。天正十二年（一五八四）の長宗我部軍との戦いで討死したと言われています。

8 薬師庵（宝寿寺）

本尊薬師如来

創建の年代は明らかではありませんが、前田氏一族によって建立・維持されてきました。当初は現在地から三百メートル西側にありましたが、享保九年（一七二四）に庵が大破したので、現在地に移して復興しました。明治八・九年（一八七五・一八七六）頃再び庵が大破したので御本尊を観音庵に預けていましたが、明治四十年（一九〇七）に庵を再興して御本尊を迎えました。終戦後、宝寿寺と改称しています。

9 宮處八幡宮

みやどころはちまんぐう

承平六年（九三六）に創建されたと伝えられています。祭神は応神天皇・仲哀天皇・

神功皇后で、氏子は前田東町・前田西町（引妻を除く）・亀田町・小村町の約千二百戸です。八幡神社と呼ばれていましたが、「讃岐国宮處郷八幡宮」の宮印が存在することから、由緒を後世に伝える目的で昭和六十一年（一九八六）に宮處八幡宮に改称しました。

境内には樹高約十メートル、幹周約一・六メートルのヤマモモがあり、市の名木に指定されています。また、かつて境内の南西部を整地した際に横穴式石室を有した古墳（宮處八幡境内古墳）が発見され、須恵器が出土しましたが、現在は消滅しています。

10 ひらおさんごうふん しおみちづか
平尾三号墳（潮満塚）

墳丘はかなり削平されていますが、残存している横穴式石室の玄室は長さ約四・五メートル、幅約二・五メートルで、前田地区で最大の横穴式石室をもつ古墳です。六世紀末の古墳と考えられます。北東には平尾小古墳群と呼ばれる群集墳があります。



市の名木「ヤマモモ」

11 平尾一号墳

ひらおいちごうふん

墳丘は削平されていますが、長さ約三・七メートル、幅約一・九メートルの玄室だけ残っており、前田地区では平尾三号墳について二番目に大きい石室です。六世紀後半の古墳と考えられます。平成十八年に行った測量によつて東讃で唯一線刻画をもつた古墳であることが判明しました。現在は石室保護のため見学することはできません。

12 金石二号墳

かないしにごうふん

直径十一メートルの円墳で、残存する玄室は長さ約三・六メートル、幅約一・九メートルを測ります。六世紀末の古墳と考えられます。



平尾1号墳 石室 線刻画

13

瀧元神社（蔵王権現）

たきもとじんじや

ざおうごんげん

社殿が瀧元山の南麓にあるので瀧元神社と呼ばれています。祭神はあらくにたまのみこと 額国玉命です。

『押光寺記』には「宝寿寺と号する伽藍にて、末寺も数多これあり、当村蔵王権現別当職相勤む。右権現も大社にて御座候・・（中略）・・長宗我部乱入の時、伽藍末寺共焼失仕候。その後、生駒家の御代、右権現別当職披仰付・・（中略）・・滝元にて寺建立仕り、御祈祷所相勤罷在候」とあり、少なくとも宝寿寺が阿弥陀寺付近に所在した中世頃までには創建されていたようです。境内や境内の南側から西側にかけて中世の瓦が出土していることから裏付けられます。

また、かつて境内には大きい松があり、昭和五十二年に高松の名木に指定されましたが、翌年松喰虫の被害で枯死しました。『讚州府誌』に「蔵王権現は前田村にあり・・・境内に大松樹あり」と記されているように、江戸時代から大木であったことがうかがえます。

神社の南には地蔵が祀ってあります。「三界万霊 天明元辛丑年（一七八一）十月 願主滝元院覚伝」とあります。元は北約百メートルの新田町との境の瀧元峠に祭られていましたが、峠付近の開発に伴い、この地に移されたものです。

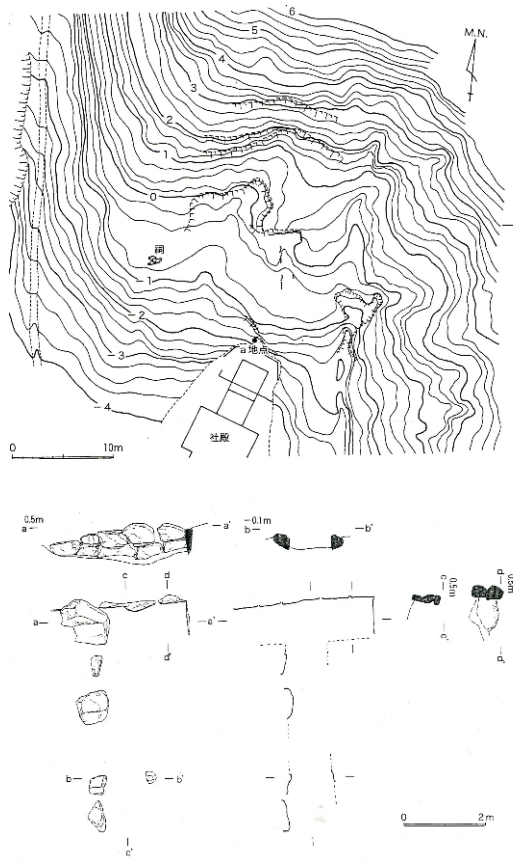
14

瀧元神社古墳

たきもとじんじやくふん

瀧元神社社殿の裏

に所在します。現状では円墳か方墳か判断できませんが、周溝および北側の人工的な削り出しから東西約十六メートル、南北約十九メートルの規模が考えられます。石室



瀧元神社古墳測量図・石室実測図

は露出しており、残存する長さは約五・六メートル、羨道幅約一・一メートル、玄室長約一・三メートル、同幅約三・三メートルで、玄室幅が玄室長より長いT字形の異なる石室構造をしています。県内で同様の石室構造を持つ古墳は知られていません。七世紀中葉から後半の須恵器が表採されていますが、正確な築造年代は不明です。石室から石製骨蔵器が出土していることから特異な古墳であることがうかがえます。

15

高松市茶臼山古墳

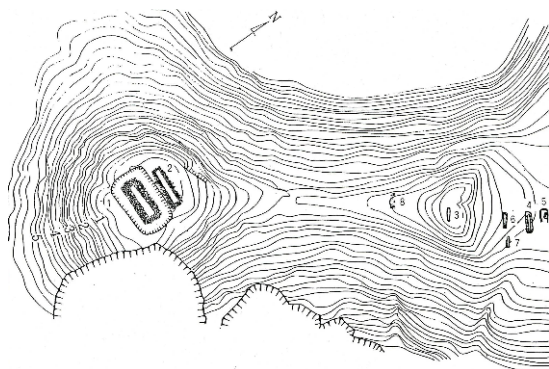
たかまつしちやうすやまこふん

久米山丘陵の東側頂部（標高約五十メートル）にあり、前田西町・新田町・東山崎町の三町境に所在する全長約七十五メートル、後円部は直径約三十五メートルを測る四世紀前半頃の前方後円墳です。発掘調査では八基の埋葬施設が確認されています。このうち、後円部中央の二基の竪穴式石室（第一・第二主体部）、前方部墳頂の組合箱式石棺（第三主体部）、前方部墳頂西よりの粘土槨（第八主体部）が古墳に伴うものと考えられています。安山岩の板石を整然と積んだ第一主体部では、中央に頭を向け合った二体の人骨が出土しました。また、がもんたいいじゆうれつしきんじゆうきよう画文帯重列式神獸鏡一点、くわがたいいし鍬形石二点、鉄刀三点、鉄剣五点、短剣十点、鉄鏃五点、やりがんな鉋一点、錐状鉄器一点、のみ小型鑿状鉄器二点、ガラス小玉一点、土師器壺二点、土師器鉢三点が出土しており、このうち腕輪である鍬形石は国内最古級のもです。第二主体部は安山岩の自然石で構築されており、鉄剣一点、大型鏃形鉄器二点、鉄鏃四点、袋状鉄斧一点、鉋一点、弓飾金具五点、ガラス小玉三点が出土しています。このうち弓飾金具は国内最古級のもです。また、墳丘出土の円筒埴輪は県内最古例であり、前方部からやや離れた部分では朱の精製に関わる石杵が出土しています。高松平野西部の在地的特徴の強い石清尾山古墳群に対して平野東部の畿内的な古墳と評価されています。

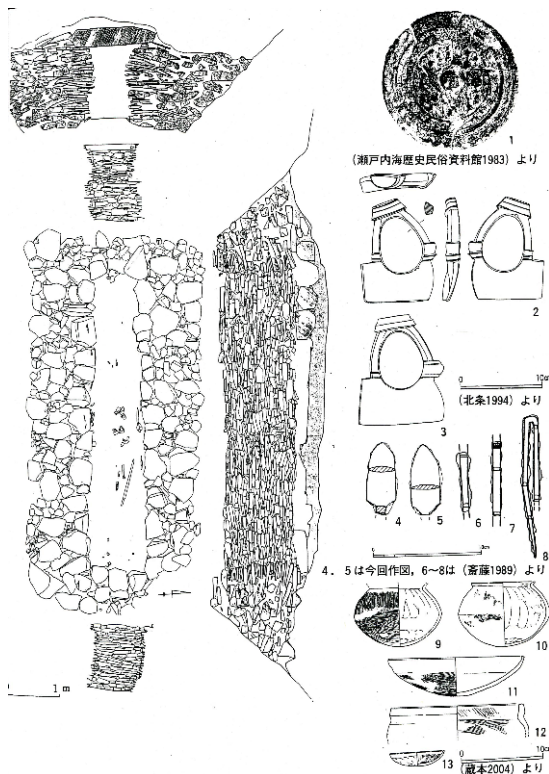
高松市茶臼山古墳を見下ろす標高約七十五メートルの尾根上に立地します。東西約十四メートル、南北約十二メートルの円墳で、四世紀頃に築造されたと考えられます。墳丘中央部に二基の粘土槨が存在し、北側の第一主体部は東側が広く西側に向かって狭くなる舟形を呈しており、木棺も舟形を呈していた可能性が考えられます。鉄刀一

16

北山古墳
きたやまこふん

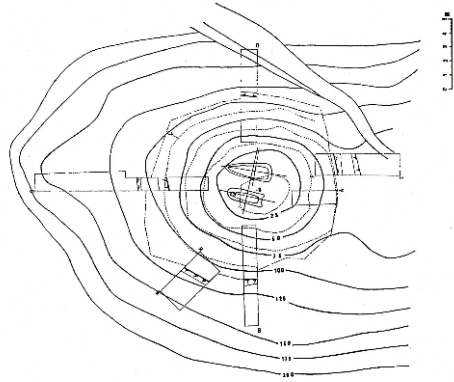


高松市茶臼山古墳測量図

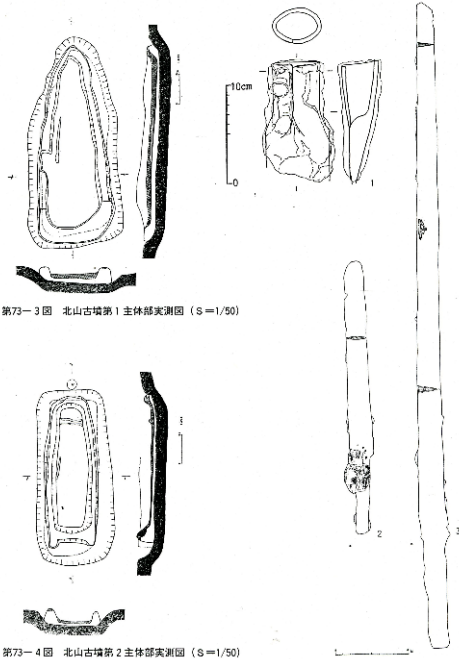


第1主体部実測図および出土遺物

点が出土しています。第二主体部からは鉄剣一点と堅櫛一点が出土しています。



北山古墳測量図



主体部実測図および出土遺物

参考文献

秋山忠一九八二『古城跡を訪ねて』高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会
 伊藤裕偉・佐藤竜馬一九九三「高松市滝本神社古墳の測量調査」『香川考古第二号』香川考古刊行会
 岩田隆一九七三「高松市北山古墳発掘調査概報」『文化財協会報特別号十一』香川県文化財保護協会
 香川考古刊行会二〇〇六『香川考古第十号』香川考古刊行会
 川畑聰ほか二〇〇七『高松市内遺跡発掘調査概報—平成十八年度国庫補助事業』高松市教育委員会
 前田郷土誌編集協議会委員一九八九『前田郷土誌』前田郷土誌編集協議会
 松本豊胤一九七〇『高松市茶臼山古墳緊急発掘調査概報』香川県教育委員会
 森格也ほか一九九五『前田東・中村遺跡』香川県教育委員会